

「ステファノの弁明 3」

2016年03月31日

使徒言行録 7章 20節～29節。このときに、モーセが生まれたのです。神の目に適った美しい子で、三か月の間、父の家で育てられ、その後、捨てられたのをファラオの王女が拾い上げ、自分の子として育てたのです。そして、モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。四十歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思い立ちました。それで、彼らの一人が虐待されているのを見て助け、相手のエジプト人を打ち殺し、ひどい目に遭っていた人のあだを討ったのです。モーセは、自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思いました。しかし、理解してくれませんでした。次の日、モーセはイスラエル人が互いに争っているところに来合わせたので、仲直りをさせようとして言いました。『君たち、兄弟どうしではないか。なぜ、傷つけ合うのだ。』すると、仲間を痛めつけていた男は、モーセを突き飛ばして言いました。『だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。きのうエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか。』モーセはこの言葉を聞いて、逃げ出し、そして、ミディアン地方に身を寄せている間に、二人の男の子をもうけました。

ステファノの弁明は、イスラエル人がエジプトで奴隷として酷使され、生まれる男児はナイル川に投げ込まれるほどの虐待を受けるようになったところまで論じた。この時に、モーセが生まれた。ステファノの弁明はモーセに関する論述が多い。モーセの律法をないがしろにしたという批判に対し、モーセの生涯を語り弁明をしようとしたからであろう。

レビ人の夫婦に男の子が生まれた。神の目に適う美しい子であったという。家族は3ヶ月間、隠していたが、パピルスの籠に入れて、ナイル河畔の葦の茂みに置いた。それを、ファラオの娘が見つめ、王女の子どもとして育てた。水の中から引き揚げた(マーシャー)から「モーセ」と名付けられた。モーセは王宮で教育を受け、逞しい若者に成長した。

モーセは自分がイスラエル人であることを知り、兄弟である同胞の苦しみを救いたいと思うようになった。ある日、同胞がエジプト人から虐待されているのを見て、助けようとして、エジプト人を殺害した。モーセは、自分の手を通して神が同胞を救おうとしていることを理解してくれると思ったが、理解されなかった。翌日、モーセは同胞たちが互いに争っているところに来合わせたので、仲直りをさせようとして「君たち、兄弟どうしではないか。なぜ、傷つけ合うのだ」と仲裁に入った。すると、仲間を痛めつけていた男は、モーセを突き飛ばし、「だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。きのうエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか」と、モーセのエジプト人殺害を口にした。エジプト人殺害はファラオの知るところとなり、命を狙われるようになった。

モーセはミディアンの地に逃れた。ここで、祭司エトロの娘ツィポラと結婚した。彼女は男の子を生み、モーセは「ゲルショム」と名付けた。「わたしは異国にいる寄留者(ゲール)だ」と言ったからである。もう一人の子どもをエリエゼル(神は私の助け、ファラオの剣から救い出した)と名付けた。モーセはミディアンで、羊飼いをしながら寄留生活を過ごしたが、同胞が虐待されていることを思い、悶々とした年月を過ごしたであろう。モーセは王宮で教育を受け、ミディアンで羊飼いをし、人間として成長する時を持った。人は皆、準備の時を与えられている。この時の過ごし方が将来を生かしていく。